

誰のため、何のための東京五輪なのか？

名古屋市長選挙のことが気になり、大阪市立中央図書館で中日新聞をチェックした。市長選をめぐる動きとともに、9日朝刊の「聖火リレーのコースをパレードするスポンサー車両＝8日、三重県伊賀市で」という写真に目がとまった。スポンサーへの「配慮」影響？と大きな見出し。大きな車には、コカコーラや日本生命、NTT という企業名が書かれている。

「県民に感染対策に協力してもらっている中で『イエーイ』と周りを盛り上げるような演出は適切だったのか。一部残念なところがあった」。三重県の鈴木英敬知事は8日、県のリレーを振り返り、スポンサーの演出に苦言を呈した。



車から流れる大音量の音楽に合わせて踊る女性。観客に声を掛けながらグッズを配る男性。7日に聖火リレーが行われた津市の沿道では、ランナーを待つ市民の前を派手な五輪スポンサー車両が通り過ぎていった。

政令指定都市では初のリレーとなった5日の名古屋市では、スポンサーが設定した名古屋駅前と栄のオアシス21の区間で、幾重もの人垣ができ、隣の人と体が密着した状態になった。

丸川珠代五輪相は6日の記者会見で「繁華街が密だった」と認め、大都市での対策として「規制できない場合は公道でないところに（コースを）移す」ことなどを組織委に求めた。ところが、組織委は5日のリレーについてホームページに「密集を回避できた」と総括を掲載。行政側との間で、温度差が浮かぶ。

組織委はリレーが始まる前に公表した感染対策で、「過度な密集が発生した場合にはリレーを中断する」と明記。密集について「多くの人の肩が触れ合う状態で複数列になっている」と定義している。ただ、愛知県担当者によると、具体的な中断のマニュアルは示されず「実際は止めようがなかったのでは」という。

スポーツ文化評論家の玉木正之さんの話。「今回の聖火リレーはスポンサー企業ファーストの側面が強く出ていて、違和感を感じる。1964年の東京五輪の聖火リレーは、若者たちが力強く走り、戦後復興を示した。だが、今回は何を伝えるのだろうか。新型コロナウイルスの感染が拡大しているが、国際オリンピック委員会(IOC)はスポンサー企業から得られる多額の費用を重視し、聖火リレーが強行されたのでは。こうした企業への配慮は五輪本番まで続くだろう。」

記事を読んで、あらためて誰のため、何のための東京五輪なのかを考えさせられた。

(2021年4月21日)